

フィールドワーク・セッション

そこ〔で・に〕生きるための、知のありか。

大洲大作 #1

《光のシークエンスー北陸本線》©Daisaku OOZU

2014/07/11/Fri
at Matsuda Lab.

「フィールドワーク」とは、何だろう。

このレクチャー・シリーズ（予定）では、諸分野の前線から（広義の）“フィールドワーカー”をお迎えし、これまでの活動や足跡について語ってもらうと共に、その「フィールド」の見だし方や読み解き方、そしてそのフィールドを通じて捉えられる《世界》についてディスカッションを行う。

Lecture 大洲大作

12:10

12:50

界面の光、みぎわの光

Session 大洲大作 松田法子

13:00

14:20

写真／まなざし 車窓／鉄道 近代／汀
東日本大震災後の地図



大洲 大作 （おおず・だいさく）

写真をメディアムとする作家。1973年大阪生まれ、横浜市在住。哲学科出身。

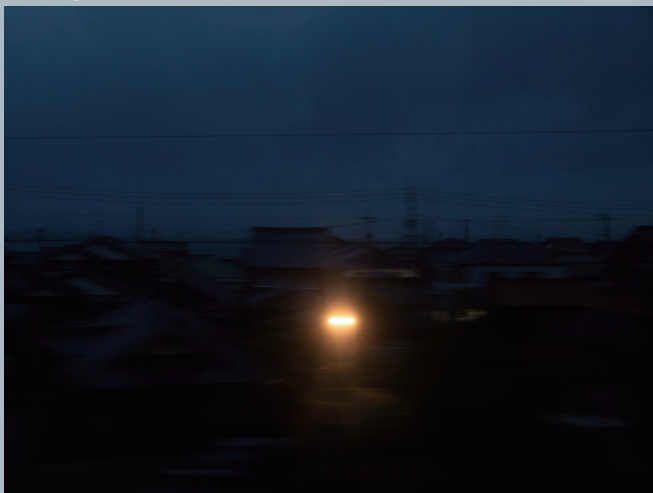
京都・大阪・ベルリンのギャラリーと東京の美術館の企画展、ドイツの雑誌等にて作品を発表。

列車など、ありふれた車窓にうつろい滲む「光」に、心にうつる光景を求める《光のシークエンス》、

何気ない風景の「影」に潜むものを探る《INVISIBLESCAPES》などを制作。 <http://www.oozu.info>

フィールドワークセッション

そこ「で・に」生きるための、知のありか。



上段左《光のシークエンスー北陸本線》 右《INVISIBLESCAPES-処分場（沼垂）》 下段左《INVISIBLESCAPES-干拓地（諫早湾）》 右《光のシークエンスー五能線》 ©Daisaku OOUZU

2014/07/11/Fri at Matsuda Lab. 12:10-14:20

————— 写真を撮る私とは、機械の目を以て「まなざし」をこころみる「眼」である。
写真では、対象と、まなざしー無二の視座からの視点と視線の選択が、多くを決定する。
私に欠くことのできない視点のひとつが「車窓」、多くの場合は鉄道の車窓であった。
車窓とは、界面である。それは光を、世界をさまざまにうつすフィールドとなる。鉄道と
写真-それぞれに制約を内包する“乗り物”が、私に思考と表現をもたらすことになった。

◆車窓ー風景と人の営み

鉄道はその原理から勾配を嫌う。古くからの路線はなるべく等高線に沿い、狭い平地をたどって敷設され、川や山を迂回しきれなくなると、ようやく橋やトンネルに入る。唱歌「汽車」で、「今は山中 今は浜 今は鉄橋渡るぞと 思う間も無く トンネルの間を通過して広野原」と描写された変化に富む車窓は、日本の地理をよく表象している。人の暮らしに適した平地の限られる日本で、等高線に沿った路線をたどる道のりは、過ぎる土地の風土や人の生活に寄り添った視点を与えてくれる。そして日本の風景は、多くが人の干渉を受けて形作られたという。その風景には、人の営みがうつる。とりわけ水際において、それは明確に感じられる。

◆日常の風景とその変容／みぎわの光景

2011年1月、八戸から三陸海岸に沿い志津川まで、車窓の撮影を行なった。3月11日、まさにその地を津波が襲う。4月、再び目にした風景は、見る影もなくその姿を変えていた。流され、失われていたのは何処にでもあるような、日常の風景だった。さらに時を経て瓦礫すら消えた風景は、決して「綺麗になった」のではない。身近な風景の不可逆の変容は、その風景に慣れ親しんだ人に、明白にまたは知らず、喪失をもたらし続けている。だが、そのように失われ、また時に再生する水際の土地は古来、生活の場でもあった。————— いま、「みぎわ」に、どのような光を視るか。また影を探るのか。

(大洲, 2014.7.1)

大洲大作 ◇略歴

1973 大阪に生まれる

1994-95 大阪国際写真センター（現、IMI 写真表現大学）にて写真を学ぶ

1997 龍谷大学文学部 哲学科卒業

◇展覧会

2008 個展 "Illusions of the Sea" 開催

(galerie magenta, ベルリン フリードリヒスハイン地区)

2010 個展「光のシークエンス」開催 (space B, 京都)

2012 個展 "INVISIBLESCAPES Images from Fukushima and all parts of Japan" 開催
(galerie son, ベルリン ミッテ地区)

2012-13 東京ステーションギャラリー開館記念企画展「始発電車を待ちながら」出展
(東京ステーションギャラリー, 東京)

2013 個展「PANORAMIC WINDOW / 光のシークエンス」開催 (サイギャラリー, 大阪)

2014 個展「大洲大作：光のシークエンス」開催
(Gallery PARC, 京都, 京都国際写真祭 KG+ 参加展覧会) ほか多数

————— 「三・一一以降、東日本大震災の被災地を巡礼のように歩き続けてきた。いくつかの原風景が存在する。そのひとつは、福島県南相馬市で目撃した泥の海である。以前は浦や潟湖だったが、明治期の干拓事業によって水田に姿を変えた。それが丸ごと津波によって水没していた。浦に戻った、江戸時代に還った、と語る声に出会った。泥の海はまさしく潟だった。潟化する世界といったイメージが生まれた」
(赤坂憲雄「あらたな会合の思想を求めて」, 2013.01.25)

————— 「大津波が来るとひと息に洗い去られて生命財産ともに泥水の底に埋められるにきまっている場所でも繁華な市街が発達して何十万人の集団が利権の争闘に夢中になる。(中略) それを止めだてするというのがいいかどうか (中略) このような人間の動きを人間の力でとめたり外らしたりするのは天体の運行を勝手にしようとするよりもいっそう難儀なことであるかもしれないのである」

(寺田寅彦「災難雑考」, 1935.07)